



教職大学院 Newsletter

No. 1

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

2008.04.01

発刊にあたって

私たちの共同社会の未来は、将来の主体としての子どもたち、次の時代を拓く若い世代の成長に懸かっています。若い世代が協働して新しい時代を拓く力を培う場であり続けるために、学校はつねに発展を重ねていくことを求められています。そしてその発展の力は根本において学校を担う教師による協働の実践と研究の展開に拠るほかはありません。いま私たちは先人が築いてきた日本の公教育の歴史を踏まえながら、21世紀の学校：「知識基盤社会に生きる力を培う学校」を実現するという課題に直面しています。学校とそこでの協働の学びを次の段階へと進める専門職としての教師の協働の実践力が問われています。

福井大学教職大学院・教職開発専攻はこうした学校を実現する教師の協働的な実践・研究を支えることを目的に創設されました。学校の発展は、学校において、そして教師を中心とする協働の実践・研究によってこそ実現される。そうであるとするならば、その場での協働の実践・研究こそ焦点としなければなりません。だからこそ福井大学教職大学院は、学校拠点の協働研究の展開とその省察を中心に据えています。これまでの大学・大学院の常識とそれがいかに大きく隔たっていたとしても、改革の中心がそこにあ

り、実践と研究の焦点がそこにあるかぎり、新しい大学院の基軸をそこに置くことをためらっているわけにはいきません。

このまったく新しい大学院に、34人の実践者、そして20人を超えるスタッフが集まりました。このプロジェクトに期待を寄せる人たちの環は、拠点校・協力校、そして県教育委員会・各市の教育委員会、そして学校改革実践研究福井ラウンドテーブルに参加してくださったみなさんをはじめ、さらに大きく広がりを見せてきています。

この通信は、それぞれの学校、それぞれの実践と研究の拠点と拠点、コミュニティとコミュニティを結び、互いの展開を共有するもう一つのコミュニティとなることをめざしています。同時にそれはこのプロジェクトの歩みをより広く伝え、記録する媒体でもあります。この通信を通して、互いの実践とそこでの省察と展望を伝え合い、より広く提起し、新しい歴史を重ねていきたいと思ひます。学校改革への積極的な提起と深い読み取り、長い展望と広い視界を、この通信を通してともに拓いていきたいと思ひます。

(柳沢 昌一)

Make it Public

Critique it

Pass it on

Built upon it

Ann Lieberman, 2005.03

内容

発刊にあたって(1)

ラウンドテーブルをふりかえって(2)

Staff 紹介(7)

教育実践と教育改革を考えるために(12)

ラウンドテーブルをふりかえって

日本の教師教育改革のための福井会議 2008/学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008

教職大学院の出発を間近にした3月1日と2日、「実践し省察するコミュニティ」をメインテーマとする公開研究会がひらかれました。教師教育のあり方、そして学校での協働研究の展開を、実践を通して探究するこの公開研究会は教職大学院の一年間の実践・省察・研究の要でもあります。この会に全国から、大学教員や院生、教育委員会や学校の先生方など、両日合わせて延べ300名近くが参加しました。この二日間を通して聴き取ったこと考えたこと、Newsletterを通して共有していく特集。今回は運営を担ったメンバーを中心にお願いしました。

私にとってのラウンドテーブル 2008

岸野 麻衣 (福井大学)

3月1～2日の2日間に渡って開催された「日本の教師教育改革のための福井会議 2008/学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008」を振り返って、それぞれのセッションで私が個人的に印象に残ったこと、考えたことを述べてみたい。

1日目は、教職大学院の設置に向けてこれまで準備を進めてきた過程を見つめ直し、今後の課題について考える機会となった。前半のシンポジウムでは、新田報告において法学等の他領域の専門職大学院の現状が述べられ、設置後の評価によって大学院の存続すら揺るがされるという提言がなされ、今後の行く末の厳しさを身に沁みて感じた。しかし続く松木報告では福井大学の教職大学院の構想が述べられ、最後に「大学の生き残りを考えて行動するのではなく日本の教育をこそ考えるべきである」と提言された。私にとってはこの言葉が非常に印象に残り、厳しい現実の中であっても、目の前の利害にとどまらず教育そのものを考え社会全体を見通した行動が求められていることを改めて感じさせられた。

後半のワークショップでは、「教職大学院スタッフの力量形成」と題して、これまで準備を進めてきた過程で何を学び、何を課題と考えるか、グループに分かれて議論があった。私自身も福井大学での取り組みを報告し、この1年を振り返る機会となった。福井大学のスタッフは私を含めて今年度着任した教員が多かったことも奏功してか、具体的なカリキュラムなどは全員でアイデアを出し合い、相互作用によって創り出してきた。その過程は率直にいうと「とにかく楽しかった」のだが、1年を振り返り報告する中で、その楽しさの意味がわかってきた。教育背景も職業経歴も異なる多様な視点で意見を交し合う中では、「これでいいのか?」という葛藤が生じることもあったが、垣根を越えてお互いを理解しあい尊重しあいながら新たなカリキュラムや教育方法を考えるうちに、自分自身の枠組み

が組みかえられていく面白さが生じていたのだ。スタッフの間に、学びあいながら協働するコミュニティが生成されつつあると感じ、今後もさらに維持、発展させていくことが課題であると感じるセッションだった。

2日目は、子どもと関わる教師のありようという教育の本質を考えさせられる機会となった。私の参加したグループは、小学校の総合的な学習の実践報告と視覚障害児への長期にわたる援助の実践報告という一見すると異質な報告がなされた。司会の身としては議論がかみ合わなかったらどうしよう…と実は一抹の不安を抱えながら始めたのだが、力量のある参加者に恵まれ、大変深い議論がなされた。両方の実践に共通することとして特に印象に残っているのは、実践の裏側にある厚みである。一見子ども主体に楽しく活動しているように見えて、その裏側には、同僚と共に厳しく何度も作り直してきた指導案があり、子どもと共に時に苦心しながら歩んできた歴史がある。議論の中で「子どもに癒される」という言葉が発せられたのだが、それは単に慰められるという意味ではなく、生き生きと学ぶ子どもを目にする喜びであり、共に学ぶ「同志」のような関係で教師自身の存在が認められる喜びでもあるのではないかと思った。

最後に、今回はラウンドテーブルの運営に携わったことで学んだことも多かった。学会等は研究者の集まり、学校の公開研究会等は実践者の集まりと二分されがちだが、ラウンドテーブルは大学と学校の垣根を越えて、研究者と実践者が対等に机を囲む会であることを感じた。2日間を終えてそれぞれに刺激を受けて活力に満ちた顔に出会うと、この会を行って本当に良かったという嬉しさと、ここから実践も研究も変えていける何かが生じる期待を感じた。運営上至らないところが多々あったことはこの場を借りて御詫びしつつ、様々な立場の先生方の今後のご参加、ご協力をお願いしたい。

わたしの1年とラウンドテーブル2008

松田 淑子 (福井大学)

横須賀薫氏、新田正樹氏、松木健一氏のご報告により、教職大学院の背景や全貌を俯瞰することのできたシンポジウムを皮切りに『ラウンドテーブル 2008』がスタートした。

Session III Zone A 教職大学院のスタッフの力量形成
Zone A には、大学関係者が集まり、5つのグループに分かれ、1グループ10名程度で『教職大学院のスタッフの力量形成』について話し合った。福井大学スタッフの一人として、事前に報告することが決まっていた私は、報告内容を考えるに当たって、自分自身とスタッフ全体の1年を振り返り、どのようなことを経験し、何を学び、どのような成長ができたのかを整理し考察した。つまり、自分自身とスタッフ全体の1年間の営みすべてを『教職大学院のスタッフの力量形成』のための『実践』と捉え、そのプロセスを『省察』し報告したのである。

報告後に、現在教職大学院構想に取り組んでおられる他大学の先生から、「松田さんは、この1年、教職大学院にかかわる『作業』をしたのではなく、きちんとした『仕事』をされたんですね。自分たちの『実務家』に対する思い込みを改めなくてはいけないと思いました。」というとても励みとなる印象深い感想を頂いた。確かにこの1年、毎日が嵐のような日々であり、思いもよらない出来事や課題が日常的に次々と押し寄せてきた。まさに『生みの苦しみ』であった。しかし常に目指すところはぶれることなく、スタッフ間で助け合いワクワクしながら一緒に乗り越えてきた。ご指摘の通り、『作業としてこなした』ことはほとんど無く、自分自身の志に基づいた『仕事』として取り組んできたのである。

また、このグループには、約20年にわたり福井大学で教育改革に取り組んでこられた元々のメンバーの一人である松木先生も同席していた。あとで松木先生は、私の報告について、「嬉しくて涙が出そうだったよ。」と言って下さった。実は、新メンバーの私が、ほとんど無我夢中で突っ走ってきたその過程を通して、結果的に教職大学院スタッフとしての力量形成の第1番目にあげたポイントは『スタッフの同僚性の構築』であった。おそらく、逆に、長年かけて基礎を積み上げてきた先生方にとっては、沢山のメンバーが一挙に入り、大所帯となったスタッフが『同僚性』を構築できるか、『コミュニティ』を創設できるか…これこそが年度当初からの大きな課題であったのだろう。その課題に対し、新メンバーの出した答えが一致

したこの1年の歩みは、私たち福井大学教職大学院スタッフの宝なのである。

Session V・VII 展開を語る・プロセスを聞き取る 2日目は、小グループに分かれ、1日かけて、2つの実践の展開をじっくり聞き合った。私のグループには、やはりこの4月から教職大学院を開設する他大学の実務家の先生、他大学の現職院生である先生、4月から福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)スクールリーダー養成コースの院生となる附属の先生、同じく教職専門性開発コースの院生となる臨任の先生、学部の1年生、といった多彩なメンバーが集まった。私は、ラウンドテーブルの経験を重ねるにつれ、本質というものは、異質だからこそ見出されやすく、迫りやすいのではないかと思うようになった。このグループの話し合いでもまた、実践の根底にある本質的な部分に自然と焦点が定まり、それぞれの立場から意見を言い合い、深め合うことができた。後日、ご報告頂いた初参加の現職の先生から、『こんな研究会今までなかった…。』そして、福井大学の先生方の、教師教育、教員養成にかける本当に『熱い』想いを感じました。やはり、真摯に、誠実に“教師”をしてきた人間にとっては『今、何かせねば…。』という想いがあるのだと共感しました。」という嬉しいメールを頂いた。

また、他のグループにいた福井大学現職院生のA先生からは、「(同じテーブルの報告者であった) B先生の報告にものごく刺激を受けました。私は今、ラウンドテーブルの渦の中に呑み込まれてぐるぐる回っています。私もB先生のような授業がしたい!私もラウンドテーブルで報告できるような実践がしたい!」という感想を伺うことができた。

その後、人づてにはあるが、B先生もまた「大変充実したラウンドテーブルだった。」とご満足されていたことを聞き、「語り手」と「聴き手」の相互作用によるコミュニケーション

**実践し
省察する
コミュニティ**
Communities of Practice and Reflection

Fukui Round Table
Spring Sessions 2008
For Reflective Practice,
Organizational Learning,
and Reflective Institutions

知識基盤社会に生きる力を培う教育と教職大学院の課題
日本の教職開発専攻の設立と福井大学2008
3/21(土) 13:30-19:30
福井大学総合研究棟 113階 会議室

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008
3/22(土) 9:00-14:40
福井大学教育学部城科学部 第1号館

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教職の実践力を培う学校職員の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2008.3.1-2
福井大学大学院教育学研究科
教職開発専攻/教職大学院
(2008年 開設予定)

※ 本大会費は、2008年11月27日付の福井大学教育研究科事務室より発行

ンの深まりという、SessionVIで柳澤昌一先生がお話されたことの意味を改めて実感することができた。

ラウンドテーブルにはいつも、まさに「袖振り合うも多少の縁」という出会いがあり、立場も年齢も専門も異なる、ほとんど初対面の者同士が語り合う中で、濃密な議論や共感がわき起こる。このような時間を持つことが、一人の教員にとっても、明日の授業にとっても、これからの学校にとっても、一番の肥やしになるのではないだろうか。

おわりに 思えば、初参加即初司会で、『ただその場にいるのがやっと』だった1年前のラウンドテーブル。『一参加者』という感じだった2007年6月のラウンドテーブル。そして、実行委員に加わり、計画段階から携わって初めて『創り出した』という自覚がもてたこの3回目のラウンドテーブル。私自身にとっても、大きな節目となるラウンドテーブルであった。

私は、教育とは、その社会の、そして一人ひとりの『未来』を創る営みだと思っている。だから、色々な方にこのラウンドテーブルに参加してもらおうということは、福井大学が発する「いっしょに教育をよくしていこうよ！このとっても困難な時代に、自分たちの未来を切り拓いて、確かなものにしていこうよ！」という誘いに乗ってもらおうことであり、このうねりの中に入ってもらうこと、同志になってもらうことなのだと思う。そして、現職の先生が教職大学院に入学されること、拠点校に名乗りをあげてもらおうことなどもすべて同じ意味なのではないかと思う。

ご参加頂いた皆さんのお蔭で、『ラウンドテーブル2008』は、激動の1年の最後を締めくくり、かつ教職大学院の門出にふさわしい大変いい節目の会となりました。本当にありがとうございました。

…さあ、遂にスタートです！

めざすべき方向を確かめる

長谷川 義治 (福井大学)

はじめに 福井大学総合研究棟Iの会議室でラウンドテーブルの受付をしながら、私は、ちょうど1年前、ラウンドテーブル2007に初めて参加し、福井大学が教職大学院の設置に向けて取り組んでいること、全国の教職大学院設置予定大学の教員を集めてラウンドテーブルを開催していることに、感動・感激したことを懐かしく思い出していました。

それから1年。福井大学教職大学院の実務家教員として、大学の研究者と一緒に教職大学院の開設準備を着実に進めながら、県教育委員会等とのつなぎ役も担ってきました。

教師教育 第1日目は「日本の教師教育改革のための福井会議2008」です。セッションIは、シンポジウム「教職大学院の創出 その構想と展望」で、前宮城教育大学長の横須賀薫氏、文部科学省の新田正樹氏、本学の松木健一氏の3人から、教員養成の現状・課題や教職大学院が目指すものなどを説明していただきました。特に、私にとっては、教職大学院は、研究者養成の大学院とは異なり、実践的指導力を備えた人材養成を目指す専門職大学院であり、そこでは、教育実践の経験を省察し、経験知として体系化して伝えることができる教師教育を目指していることなど、かなり整理した形で理解する機会になりました。

セッションIIIは、「教師の協働的な力量形成を支える」をテーマにしたワークショップで、私が参加したグループでは、長野県伊那小学校の「総合学習・総合活動の取組」、富山県堀川小学校の「授業公開の日常化の取組」、福井県

至民中学校の「授業研究を中心にすえた協働研究の取組」の発表がありました。教員の資質向上を目指した実践報告で、しかも、いずれの発表も、授業づくり・授業改革が中心テーマであったことに、改めて、勇気付けられる思いがしました。

実践を語る 第2日目は「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008」です。セッションV・VIIは、「展開を語る／プロセスを聞き取る」をテーマに、小グループに分かれて実践の展開を聞き合いました。私が参加したグループでは、福井大学附属中学校の「探究型保健学習」、長野県伊那小学校の「総合活動の実践事例」の発表がありました。前者については、子供たちの学びをナラティブに記録しており、授業参観していない場合の事例研究であっても、授業の展開が生き生きとイメージでき、記録化する意義を体感することができました。後者については、伊那小学校では総合学習・総合活動を軸にして各教科の学習を展開し、しかも、学力調査の結果は県平均を上回っているということを知り、大変驚きました。

おわりに ラウンドテーブル2008に参加された宇都宮大学の松本敏氏との御縁で、3月中旬、宇都宮大学開催の「大学との連携による学校活性化フォーラム」に参加し、栃木県の公立小中学校で展開している実践を聞く機会を得ました。「生徒指導で苦労して中学校が、授業改革に取り組んだら、生徒が落ち着いてきた。」という話を伺い、教職大学院が目指すべき方向を改めて強く意識しました。

(参加者は20名ほどでした)

実践の省察・再構成を通して
活動の組織を専門性形成のための
学び合う共同体に変えるために

省察的な実践を生み出す 学び合う組織を編む

For Reflective Practitioner,
Professional Development,
and Organizational Learning.

実践研究・福井ラウンドテーブル

2001.11.10-11

福井大学地域科学部

地域や職場の実践の場で、自分たちの実践をじっくり問い返し、その省察をふまえて実践を編み直していく。そのことを通して、地域や職場を、大人同士が語り合い学び合う共同体に変えていく。

その中で一人一人が、省察的な実践者としての力量を培っていく。

そうした地道な取り組みが、少しずつ蓄積されてきています。そうした取り組みを互いに紹介しあい、じっくりその展開を聞き、学び合う場をどのように編んできていくのかに光りを当てたいと思います。

福井では、福井大学公開講座として、「フォーラム・暮らしと学びを問い返す」という取り組みを続けてきました。また社会教育実践研究フォーラムでは、実践記録を読み合うことを通して、実践研究を深め、実践的な力を培っていく条件を探ってきました。このカンファレンスはこうした取り組みに基づいています。

このラウンドテーブルは福井大学公開講座の一環として開催されます。

実践研究福井ラウンドテーブル実行委員会/
福井大学公開講座現職のための実践講座 approach 1

福井新聞社提供「教職大学院 課題探る」2008.3.2

教職大学院 課題探る

福井大 シンポに1期生ら130人

教育現場で中核を担う中堅教員や実践的な指導力を備えた新人教員を養成するため、福井大などが四月に開設する「教職大学院」など教育改革を考えるシンポジウムが一日、福井市の同大文京キャンパスで始まった。県内外の教員や同大教職大学院(教職開発専攻)の第一期生ら約百三十人が、今後の課題などを探った。

二日間の日程で、初日は「知識基盤社会に生きる力を培う教育と教職大学院の課題」がテーマ。中教審の専門職大学院ワーキンググループで主査を務めた前宮城教育大学長、横須賀篤氏、教職大学院の制度設計に携わった文部科学省生涯学習政策局の新田正樹氏、福井大教育地域科学部教授の新田氏は、既存の修士課程と教職大学院との違いや実践的指導力とは何かを明確にしておく必要があると指摘。横須賀氏は、大学ではなく、学校現場の中で生き残っていきける大学院にしなければならない」と話した。

この後、参加者の大学教員は「スタッフの力量形成」、小中高校の現職教員は「学校における協働研究」をテーマに、小グループに分かれ事例発表や意見交換を実施。二日も引き続きグループ討議を行う。



松木健一氏が、同大学院創設の意義や今後の課題について話した。

松木氏は、全国で教員養成改革が進まない背景として、伝統的学習観や教師観、学術的研究などへの「とらわれ」がある」と指摘。福井大教職大学院の在り方として、大学の教員の意識変革を掲げ、学校現場での事例を中心とする演習を基本に「実践」「省察」「再構築」などのサイクルを院生自らが体験できるカリキュラムづくりを進めるとした。

今後の方向性として「教職大学院間の協働の実現が不可欠」と強調。担当教員の研修機構や相互評価システム機能などネットワーク構築の必要性を挙げた。

Staff 紹介①

教職大学院にはさまざまな分野で実践と研究を重ねてきているメンバーが集まっています。そして教職大学院の専任教員ばかりでなく、多様な視点と位置からこの教職大学院を支えています。そうしたスタッフそれぞれの固有の実践と研究のあゆみ、教職大学院に寄せる期待、これからの展望について語ってもらいます。

森 透 もり とおる

いよいよ 2008 年 4 月から教職大学院(教職開発専攻)が
出発するが、それに向けての準備のスタッフ会議は毎週も
たれている。その場の雰囲気は熱気がほとぼしり、みんな
一丸となって、歴史的に初めての体験を味わいながら、教
職大学院出発に一步一步近づいている。私の専門は臨床教
育学と教育実践史であるが、教職大学院で中心に位置づけ
られている「理論と実践の往還(融合)」のプロセスの中
で、私の専門を活かせたらと考えている。

私は現在附属幼稚園の園長という立場で、附属の子ども
達が幼稚園から小学校・中学校へと進学していくプロセス
をあとづけ支援したいと考えている。幼児教育はあらゆる
教育の基盤であり、附属の掲げるテーマはそれぞれ独自性
があるが、意味する内容は共通性があり相互に通じ合うと
考えるからである。今後、附属の4校園(附属幼稚園・小
学校・中学校・特別支援学校)は教職大学院の拠点校の中
核としての役割を果たしていく必要があると考えている。

すでに 2001 年度から福井大学大学院の中に「学校改革
実践研究コース」を設け拠点校をベースにした実践研究を
行ってきた。その実績があるからこそ、今回の歴史的に初
めてのチャレンジである教職大学院を実現できたと考えて
いる。全国で 19 の教職大学院が
出発するが、たぶん福
井のような中身をもった大学院はほかにはないのではな
いと思う。学校改革実践研究コースで目指していたのは、
学校に根ざして、その学校の改革課題を学校と大学が協働

して考え実践していく
ということである。そこで大
事にされていたのは「理論
と実践の往還(融合)」で
ある。理論が前提にあり、
それを実践に適用する、と
いう一方通行ではなく、理
論はまさに実践というフ
ィールドの中から生み出
される。理論は実践の複雑
な「状況」によって検証さ
れる。大学のメンバーと学校
のメンバーがお互いに学び
合いながら、理論と実践を
協働で創り出していく。こ
れらのプロセスが、教職大
学院でも最も重要視される
だろう。

スクールリーダーコースの先生方やインターンシップ
の院生たちが、それぞれの学校の抱えている課題と正面か
ら向き合い、「理論と実践の往還(融合)」を日常的に進め
ながら、一人一人が自らの中で、教師としての専門的力
量、実践的力を獲得していくことができればと期待してい
る。福井大学の私たちも、実践の場から学ぶこと、自らの
専門性を実践のフィールドで鍛えられたらと期待してい
る。協働で学びあう場・フィールドが教職大学院であるし、
そのような教職大学院をみなさんと一緒に創り上げてい
きたいと考えている。



<参考文献>

ドナルド・ショーン/柳澤昌一・三輪健二監訳『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、2007年
森透「教育実践の事例研究を通じた教育学の再構築—<実践—省察—再構成>の学びのサイクルの提案」『教育学研究』第74
巻第2号、2007年6月号

石井パークマン麻子 いしいパークマンあさこ



はじめまして。石井パークマン麻子です。専門は障害児教育・特別支援教育です。

人の縁、国との縁は不思議なものです。私の場合は日本で特殊教育教師として7年間仕事をした後、スウェーデンに移住しました。連れ合いがスウェーデン人であったことがきっかけです。まずスウェーデン語を集中的に学び、知的障害者のためのセンターでスタッフとして仕事を始めました。そこでは日本の養護学校から転勤したような気持ちになりましたが、4年仕事をした後、今度は公立障害児学校の教師になりました。その時に実感したのは、教師としての仕事の醍醐味は「相互成長」である、ということでした。

その学校には、スウェーデン人の子どもたちや他の国からやってきた移民の子どもたちもいました。障害のためにコミュニケーションが難しい生徒たちも多かったのですが、授業のやり方や教材、介助の工夫をし、相手を理解するための努力を重ねると、確かに相手との距離が近づいて来るのでした。心を開いてのコミュニケーションが始まり、お互いに理解し合えることは喜びであり、生徒にとって意味のある教育活動を展開する、入り口に立つことができたのです。障害のある生徒たちは、教師にさまざまな工夫をさせ、人の尊厳を思い出させ、教師を成長させてくれると思いました。これは国が変わっても、皮膚の色や言葉が異なっても、同じです。

やがてスウェーデンに特有の専門職である「特殊教育家」の免許を取得し、次の10年間は、現職教員教育に従事することになりました。幾つかの公立学校で、障害児を受け持つ先生方の継続教育を担当しました。期間は2年から5年が多く、中には10年続けた学校もあります。

継続的に学校へ出かけて、授業作りに参画し、授業研究をし、私自身も授業をし、その後リフレクションを中心にした話し合いや演習をしました。このやり方は、福井大学の教職大学院で展開しようとしている、「大学教員が学校へ出向く」という形と似ていると思います。経験豊かな先生方が、忙しい中自発的に勉強し、生徒への洞察や専門知識を深め、生徒を引き込む授業を展開する。その過程を援助できたことは、とても充実したものであり、幸せを感じ

ました。振り返ると私自身にとって、「役割の中で成長する」ことができた年月であったと思います。

この時期に手がけたプロジェクトの一つに、医療の専門家たちとチームを作り、ある重度重複障害児のための椅子を開発し、製品化したものがあります。教育職だけではなく、同じ生徒のために働いている隣接分野の専門職と一緒に、問題の解決に取り組んだことは、大きな成果を上げました。その過程での、わくわくするような対話や問題の理解のし方の多元性は、お互いの視点をとても豊かにするものでした。

さて、そのスウェーデンに20年暮らし、仕事と研究に19年従事した後、再び日本へ引越したのです。理由は、日本の大学における教員養成という仕事に、魅力を感じたためでした。福井大学に着任したのは、2005年11月のことです。

教員養成はいつかは取り組んでみたい仕事でしたから、2年はまたたく間に過ぎました。今年度からは教職大学院に所属するとともに、学部および従来の大学院の授業も受け持つ立場で、仕事をします。必要に応じてこれまでの経験を生かし、日本の教職大学院の構築に貢献できれば幸いです。

最後に、教職大学院についての私のビジョンについて、記したいと思います。担当教員それぞれの専門性を生かし、風通しのよい、柔軟性のある組織を目指したいと考えています。諸学校との連携を中心におく大学院ですから、学校の先生方や関係諸機関の方々と、お互いの役割を尊重した、協力関係を築いていきたいと思っています。同時に、大学内における様々な専門性をもった方々との連携を図ることが、不可欠だと考えます。教職大学院が、現場の先生方と大学生たちにとって魅力的であり、ダイナミックに機能する、福井大学の一機構となるように、育てたいと思います。また私自身は、相手の自発と自立を援助するために、必要に応じて、適切な距離を保てる存在でありたいと願っています。どうぞこれから、よろしくお願い致します。

淵本 幸嗣 ふちもと こうじ



福井大学教職大学院の開設にあたり、平成19年4月1日に実務家教員として赴任いたしました。私はそれまでの27年間を中学校の社会科教諭として19年間、県教育庁学校教育課・義務教育課の指導主事として6年間、そして、新設の福井市立本郷幼稚園の副園長、福井市本郷小学校の教頭として、2年間勤務いたしました。

中学校では、生徒指導上の諸問題に対する先輩方との協働、福井市社会科授業研究会での探究型の90分授業公開、全員野球をベースとした考える野球で松井秀喜選手のチームを破っての全国大会出場、文部省や県の派遣研修によるドイツ、チェコ、フィンランド等の海外教育事情視察等の貴重な経験をさせていただきました。

県教育庁の指導主事としましては、生徒指導、学力向上、福井型コミュニティスクール、教員研修等の業務を担当することで、教育行政の立場から多くのことを学ばせていただきました。

また、本郷幼小学校では、管理職として新設校立ち上げにたずさわり、学校経営やマネジメントの重要性を実感することができました。1)

本郷幼稚園・本郷小学校を去る離任式において、4歳の幼稚園児からは、「いつも遊んでくれてありがとう。」と声をかけられ、成和中学校時代の教え子の子どもからは、「福井大学に行かれても僕たちのことを忘れないでください。」というはなむけの言葉をもらうことになりました。まさか、教え子の子どもに送られる日が来ようとは夢にも思わず、改めて月日の流れの速さを感じるとともに、残された自分自身の教員人生の在り方を考えずにはいられませんでした。

青天の霹靂で始まった大学での生活は、これまで経験したことのない異文化との出会いの連続でした。中でも「実践と理論の融合」とか「現場の実践者と大学の研究者との協働」ということは、頭では分かっていますが実際のところ

本当に可能なのだろうかと不安な日々でした。

しかし、拠点校の学校改革に参画したり、それぞれ専門の異なる教職大学院のスタッフと21世紀の教育について熱く語り合ったりする中で、現場の実践とともに歩む福井大学教職大学院の可能性を徐々に実感できるようになりました。自分の立ち位置が見えてきたように思います。NHKの朝の連続ドラマの「ちりとてちん」では、伝統若狭塗り箸の話が出できます。「貝殻や卵の殻、松の葉等を漆の中に埋め込んで塗り重ね、心を込めて研ぎ出すことで美しい模様になる。」「塗ったものしか出てこないし、何を塗ったか分かっている者が磨くから機械とは違うものができる。」「伝統若狭塗り箸は多くの人に支えられて、次の世代へと受け継がれていく。」というような言葉を聞くにつれ、教師の力量形成や同僚性の構築も同じことだとなつくづく思うようになりました。

教職大学院には学部卒のストレートマスターや臨時任用教員、学校・地域の中核となるスクールリーダーが、34名入学してきました。学校改革やマネジメント、同僚性の構築や協働研究等について、教職大学院では多様なクロスセッションが授業として行われます。その中で私は、自分自身のこれまでの教育実践について振り返る機会を得ました。それは、これまで塗り重ねてきたものを磨きあげる作業であり、長期スパンで自分自身の実践を捉え直し、意味付けるリフレクション(省察)そのものでありました。

これまで多くの先輩や同僚の実践から教えてもらったり、盗むように学んだりした専門職としての暗黙知は、私だけの財産として意識して人に伝えることもせず、ある意味封印してきたように思います。今、それらを記録化し、年齢や専門の違う人々と語り合い聴き合う関係の中で、次の世代に確実に伝えていくことの重要性を再認識しています。

教頭会の教育課程部会で授業改革による学校改革を提言したこと、へき地複式の学校での地域コミュニティづくりのこと、年間7泊の長期宿泊体験活動のカリキュラムマネジメントのこと等、その時は実に困難なプロジェクトと思われた実践について、結果だけでなくその展開のプロセスを丁寧に物語ることで、次の世代に教職としての大切な部分を少しでも伝えていくことができればと考えるようになりました。

県教育委員会や拠点校の校長先生方との関係構築会議を開催するにあたり、先輩からいただいた、「日本の教師教育のモデルとなるような質の高い教職大学院を創って

ください。「現場で役に立つ実践力のある先生を送り出してください。」「教科の専門性や実力もつけなければ話になりません。」というような励ましの言葉を肝に銘じつつ、教職大学院の素晴らしいスタッフとの化学変化を楽しみたいと思います。

また、研究者とのコラボレーションの中で学んだショー

身の実践の省察の質を高め、皆が相互に学び合える実践的なコミュニティ形成の実現に向けて努力したいと思います。

残り10年となった教職の節目にあたり、かくもやりがいのある仕事に出会えた幸せに感謝しつつ、「ヘッドワーク、フットワーク、ネットワーク」を大切にして頑張っていきたいと考えていますので、皆様の変わらぬお力添えをよろしくお願いいたします。

- 1) 淵本幸嗣「教職大学院と実務家教員」, 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)『教師教育研究』I-1, 2007, pp. 49-108.
- 2) ドナルド・ショーン『専門家の知恵』(佐藤学・秋田喜代美訳) ゆみ出版, 2001.
- 3) ドナルド・ショーン『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』(柳沢昌一・三輪建二 監訳) 鳳書房, 2007.
- 4) エティエンヌ・ウエンガー他『コミュニティ・オブ・プラクティス』(櫻井祐子訳) 翔泳社, 2002.

福井新聞社提供 教師教育「日本のモデルに」：教職大学院 福井大で来月始動 2008.3.24

2008年(平成20年)3月24日(月曜日) 福井新聞

教職大学院 教師教育 「日本のモデルに」

福井大で来月始動

高度な専門知識・技能を持つ教員の養成を目指す福井大の教職大学院が四月、本格スタートする。学ぶのは小・中・高校などで、既に中核として活躍している現職教員ら。大学の教授陣が院生の学校に出向き、校内研修と一体化して行われる実践重視の授業。院生が働きながら、原則的に一年間で修了できる工夫。同大の教授らは「量・質とも優れた教師教育のモデルを福井から発信したい」と意気込む。

教職大学院は、法科大学院などに代表される「専門職大学院」の一つ。専門職の人材育成に特化したカリキュラムが特徴で、四月から全国十九の大学に設けられる。福井大の場合、同大学院教

育学研究科に新設した「教職開発専攻」が教職大学院。四月から現職教員向けのコースに十九人、学部新卒者向けのコースに十二人が入学する見込みだ。

◆ ◆ ◆
 現職教員の一人である中の教務主任、大橋敏教諭は「大学の先生に現場に入ってもらい、実際の課題に助言をもらえるのがありがたい。その過程

で自分の力量も高められ、今までの院と違った「違い」と期待する。同大の教職大学院の特徴は、授業の多くが大学でなく、院生が務める「拠点学校で行われる」とい

「自分が懸け橋になり、ほかの先生と成果を分けたい」というのは福井市豊小の研究主任、宇野泰裕教諭。ただクラス担任も受け持つことになつており、院との両立は課題だという。同大学院

では、現職教員が学ぶ負担を軽減する工夫もされている。

院生は基本的に二年間で四十五単位を取得するが、現職教員は公開講座の知の在り方が変わり、教師も変わらなければならぬ。福井県はモデルをつくるには手ごたえがあり、むしろ一年間で修了することが原則という。福井大の教育分野の大学院のうち、教職大学院は定員の四割以上になるが、それでも三十人。半数を占める現職教員を受講する教職大学院の入学予定者ら。現職教員は単位の一部を取得した上で入学する。福井大

現在拠点校は、県内の国公立校と、県教育研究所など三方所の教員研修施設。拠点校以外に勤務する院生は福井大などで授業を受けるが、公開授業などの機会に拠点校での研究に加わる。一方、学部新卒者らにとつては、拠点校は一年間のインターンシップ(就業体験)の場だ。

◆ ◆ ◆
 「自分が懸け橋になり、ほかの先生と成果を分けたい」というのは福井市豊小の研究主任、宇野泰裕教諭。ただクラス担任も受け持つことになつており、院との両立は課題だという。同大学院

では、現職教員が学ぶ負担を軽減する工夫もされている。

院生は基本的に二年間で四十五単位を取得するが、現職教員は公開講座の知の在り方が変わり、教師も変わらなければならぬ。福井県はモデルをつくるには手ごたえがあり、むしろ一年間で修了することが原則という。福井大の教育分野の大学院のうち、教職大学院は定員の四割以上になるが、それでも三十人。半数を占める現職教員を受講する教職大学院の入学予定者ら。現職教員は単位の一部を取得した上で入学する。福井大

勤務校で実践的授業

現職は1年修了目指す



	定員	合格者	うち現職教員
〈国・私立連合型〉			
京都教育大	60人	66人	23人
7私立大			
〈国立〉			
北海道教育大	45	32①	22
宮城教育大	32	33	28
東京学芸大	30	39	17
群馬大	16	17②	11
上越教育大	50	31①	16
福井大	30	34	19
愛知教育大	50	23①	14
岐阜大	20	22	14
奈良教育大	20	19③	6
兵庫教育大	100	90①	40
岡山大	20	20	10
鳴門教育大	50	37①	33
宮崎大	28	32	5
長崎大	20	24	7
〈私立〉			
早稲田大	70	59	20
創価大	25	30	15
玉川大	20	18④	7
常葉学園大	20	18	8

4月に開設される19の教職大学院
 ①②③④は、合格大専⑤⑥は、集院への入定者⑦⑧⑨は、追加募集の募集日⑩は、現在、11日募集の募集日⑪は、7月3日募集の募集日⑫は、3月7日募集の募集日⑬は、3月7日募集の募集日⑭は、3月7日募集の募集日⑮は、3月7日募集の募集日⑯は、3月7日募集の募集日⑰は、3月7日募集の募集日⑱は、3月7日募集の募集日⑲は、3月7日募集の募集日

授業作り「論より現場」

教職大学院 福井大で先取り



教職大学院のスタッフらが、養護学校の授業を見学＝福井市の福井東養護学校・月見分校で、山本写す

出身校で同僚と議論

小中高の生徒指導や授業づくりでリーダーとなる教員を育てるといって「教職大学院」。4月から全国19カ所の大学が新設し、現職教員や大卒の計約7000人が学び始める。中でも福井大の教職大学院は、小中高の授業に出かけていき、そこを院生の学びの場にするというユニークなもの。モデル授業を自習し、「論文より実践重視」をうたった「新型大学院の意義と課題」を探究した。（山本晴美）

モテル授業の舞台は福井東養護学校の月見分校（福井市）。養護学校として、不登校の子も、発達障害、心身症などで大集団に入れない生徒が多い。記者が訪れた1月末、10人余りのクラスは食品添加物を学んでいた。

「AとBの液体、さて正体はなんだと思う。」先生がにこやかに問いかける。AとBを飲みくらべ、ひとしきり感想を言

教員リーダー養成へ19カ所

発達障害、いじめ、小学校英語、体験学習……。子どもも課題もどんどん多様になる中、幅広い知識で同僚を引っ張れる教員リーダーが必要になってきた。

こうした事情を背景に、中央教育審議会（文部科学相の諮問機関）が06年、研究者というより教員リーダーを育てる「教職大学院」の創設を提言。文科省が07年、各大学からの設置申請を受け、19カ所を認

求めた。教員リーダー像やカリキュラムは、各大学院によって異なる。だがいずれも模擬授業、グループ討論といった「実践」を重視。周りの小中高から「連携協力校」を得るよう義務づけられ、院生はこの連携校などで10単位（3500〜4000時間）以上の実習をこなさなければならない。

現職教員が院生になる場合は、実習がある程度免除されるため、標準2年のところを1年で修了すること

が向く人が多いためでしょう。8大学による連合教職大学院を準備した京都教育大の武蔵野野副学長は言う。大学院を出た後、処遇面でのどんなメリットを受けられるのか、また見えな

東京都教委は採用試験を実施するとき、都内の教職大学院を出た人については、「特例」をもうけるなどで大学院側と合意。2月に協定を結んだ。こうした教委と大学院の連携強化が急がれる。

「Aは天然果汁。Bは清涼飲料のジュースやろ。」

「すごい！ Aは果汁100%、Bは0%でした。」

生徒との対話の間に、先生は添加物を混ぜて色をつくる実験をしたり、図と写真を使って解説したり。その様子を、同僚の先生たちや、4月から教職大学院の教員となる研究者、校長OBらが見守る。

モテル授業の後は、養護学校と教職大学院のスタッフが交じって3班にわかれ、2時間弱にわたる意見交換になった。

養護側「自分の問題じゃないと、興味をもてない子が多い。今回は身近な題材を選び、視覚に訴える工夫もしました。」

大学院側「発達障害のある子には、授業の流れを明確に示してあげたい。そうすると、子どもはとも安心するはず。」

こんな具合で、授業改善の知恵を出しあう。

福井大は01年度から、通常の大学院の修士課程に現職教員を受け入れ、その先生たちの出身校へと出向いて学びあうコースを開校。「院生」である先生だけでなく、同僚の先生にも加わってもらい、「現職教員と研究者とで学校改革」を試みてきた。このコースが、4月から始まる教職大学院の下地になるといふ。

準備を進めた一人、松木健一教授は言う。「教職大学院の目的は、授業づくりや生徒指導でリーダーになる先生を育てること。ただ、個々の先生を研修させて終わり、というのでは効果が小さい。リーダーのもとに、先生たちが協働して問題解決にあたるのを、丸ごと支えたい。」

先生が学校を1〜2年間も休むことなく、大学院を修了できるように、という配慮でもある。大学院が向く先の「拠点校」は、福井県教育委員会と相談し、県内10校と先生たちの研修施設と決まった。教授陣15人のうち、3〜4人がチームを組んで各校を支援。先生の経験がない新卒の院生も、拠点校の学びあいに加わるという。

教職大学院の成否のカギを握るのは、県教委と連携がとれるかどうか。「教職

修正をとった人たちが探している。処遇もあまり心配していない」と、松木教授は言う。院生予定者のうち15人は、県教委がリーダー格と見込んだ「推薦付き」。2人の院生を出す学校には、非常勤の先生1人分を増やす約束もできている。

25 教育 10版 2008年(平成20年)3月10日 月曜日

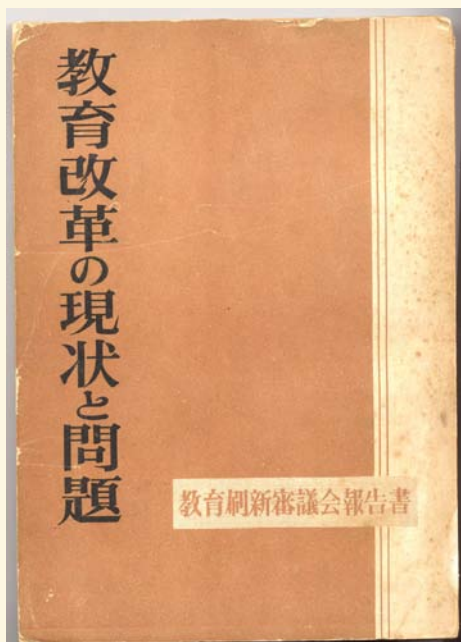
大学

朝日新聞社提供 授業作り「論より現場」：教職大学院 福井大学で先取り

2008. 3. 10

教育実践と教育改革を考えるために (1)

教育刷新審議会編『教育改革の現状と問題』教育刷新審議会報告書,日本放送出版協会,1950.8



戦後日本の教育改革の基本的構想を審議した教育刷新委員会・教育刷新審議会。122回におよぶ総会、20の特別委員会の議論の全容は日本近代教育史料研究会編『教育刷新委員会・教育刷新審議会会議録』(全13巻,岩波書店)に収録されている。本書『教育改革の現状と問題』(日本放送出版協会)は、1950年、教育刷新委員会・審議会の中心的な委員自身がまとめた戦後教育改革の基本的理念と構想に関わる公的な報告書であり、現在に連なる日本の公教育が戦後何をめざして再出発したのかを示すもっとも重要な史料の一つである。「人格の完成」「平和的な国家及び社会の形成者」をめざす教育の理念、より多くの人々により質の高い教育の機会を開く6・3・3制の教育制度改革、そしてそれと連動する大学教育の拡大と大学における教員養成の実現。その方向定位は、その後幾多の揺り戻しへの動きにもかかわらず戦後日本の教育と社会を根本において規定し、そしてまたつねに選び続けられてきたといえるだろう。そしてこの日本の戦後教育改革の基本的構成が、20世紀後半の世界の教育改革の基本的方向を先導的に切り開くものであったことを、21世紀に入ってようやく私たちは歴史的な事実として確かめるに至っている。

その「序論」で、この委員会・審議会において一貫して中心的な役割を果たしてきた南原繁は、教育改革の実現は「世紀を費す事業」であり、同時代の人々の「不屈の意志」とともに、「世代をかけての不断努力に懸る」ものであると述べている(p.8)。敗戦後の状況、占領下の日本において、その中でこそ自主的な教育改革の実現をめざした南原たちの企図とその展開を示す『報告書』と『会議録』は、戦後教育史上の歴史的な文書であると同時に、一つの社会的な実践と協働探究、そして政治過程の克明な記録でもある。後世の史家の、結局は改革の部外者の位置からの批評や批判ではなく、時代は隔ってはいても、同じく改革の当事者の立場と視点にたつて、内在的にこの実践記録を読み解こうとするならば、わたしたちは教育改革の曲折に満ちた歴史的な経験から学び取る手がかりがそこにゆたかに与えられていることに気がつく。自分たちの自身の経験が、歴史的な経験に重なっていること、それに支えられ、そして連なっていることにより気がつくことになる。(柳沢 昌一)

Schedule

- 4/26-27 sat 合同カンファレンス (9:30-17:00) 教育地域科学部 1号館
- 5/24 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30) 教育地域科学部 1号館 (午前は合同、午後は各自で進めます)
- 6/6 fri 附属中学校公開研究集会
- 6/14 sat 附属幼稚園研究集会
- 6/28-29 実践研究福井ラウンドテーブル

教職大学院 Newsletter No.1
2008.04.01

編集・発行
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

team0 : 石井 恭子・岸野 麻衣・松田 淑子・柳沢 昌一

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp